事例の「名前」	事例の説明
花火の時はバケツに水	花火する時は必ず水を入れたバケツを準備しろと教えられましたよね？ちょっとした不注意による火事や事故を防ぐ大事な伝統？だと思います。
多重防御	仙台の取り組みとしては複数の構造物で津波被害を軽減する仕組みのこと。一般的にはハード、ソフトを総動員しての防災の仕組み。情報セキュリティなど他分野でも用いられる言葉。
新東名高速道路	災害を想定しての場所、道路幅、東名との相互補完などが考慮されている。
電車は真ん中の車両に乗る	地震などで列車が脱線転落する可能性は端の車両が高く、真ん中の車両は脱線しても単独で転落するリスクが低い
ガソリンの頻繁な給油	震災時、ガソリンスタンドには長蛇の列ができ、多くの方が困った。頻繁に給油することにより、災害発生時に焦ることが少なくなる。
鉄路からBRTへ	津波被害で鉄路の確保ができにくくなり、バスが専用線を通行する仕組み。被災地だけでなく、今後、鉄路が廃線となるなどの事態になったときに、BRTにかわっていくのかもしれない。単に、バスによる代行になるのかもしれないが。
ユーモアの力	『夜と霧』でフランクルは、「ユーモアも、自分を見失わない魂の武器だ」と言った。人間には、困難な状況から一瞬で距離を取り、その状況を笑い飛ばすことが出来る力があることを証明している。東日本大震災の避難所では、無意識の行動ではあると思うが、ユーモアを口にし、周囲を（もちろん自分自身も）和ませたとのエピソードは多くきかれた。
メモリアルコンサート	月命日にせんだい3.11メモリアル交流館で行なわれる演奏会（主催＝仙台市/企画制作＝公益財団法人音楽の力による復興センター・東北）
映画・テレビドラマ	ドキュメンタリー、フィクション、震災をテーマにさまざまな映画がつくられました。 NHK朝の連続ドラマ小説「あまちゃん」「おかえりモネ」は話題になりましたね。
ARCT(Art Revival Conection TOHOKU)	舞台人による復興支援のためのネットワークとして2011年4月4日に発足した「ARC＞T」。2年間で数百回に及ぶアウトリーチ活動や内外からの舞台芸術の支援の受け皿となったこの団体は、2013年7月7日、「ARCT」として再出発し、震災復興に限らず文化芸術振興に取り組んでいる。
復興コンサート	避難所や仮設住宅、被災地域の広場などで被災者を慰問するために、たくさんの音楽イベントが開催された。東日本大震災では、2011年3月26日に仙台フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる「第1回復興コンサート」が佛光山見瑞寺/籾江道子バレエスタジオ（仙台市宮城野区）で開催された。この催しが、翌2012年9月の「一般財団法人音楽の力による復興センター・東北」の設立につながった。
公益財団法人 音楽の力による復興センター東北	音楽を通して震災の犠牲になられた方々を鎮魂し、ご家族や生活を失われた人々に寄り添い、地域再生のための希望の灯をともすことを目標に、被災地域に直接出向いて音楽を届けている団体。東日本大震災から2週間後、仙台フィルハーモニー管弦楽団と市民有志が立ち上げた「音楽の力による復興センター」を出発点とし、2012年9月に「一般財団法人音楽の力による復興センター・東北」を設立、2014年4月には公益財団法人に改組した。
被災地でのフェスティバル	リボーン・アートフェスティバルなどの芸術祭や、ガマロックフェスなどの音楽祭。
江戸の火消し	エリアごとにチームがある。延焼を防ぐために家を潰す技術。
霞堤	増水時に遊水池に水を招き、下流に一気に流さない仕組みの堤防。武田信玄考案と言われている。

事例の「名前」	事例の説明
「はだしのゲン」	戦争、原爆の悲惨さを伝えるマンガ
天災は忘れた頃にやって来る	寺田寅彦の講演での発言(とされる)。真っ先に思い浮かんだ言葉。
五月雨を集めて早し最上川	芭蕉の有名な句ですが、斎藤茂吉の「逆白波」の句と合わせ、氾濫を繰り返す最上川の猛威を伝えるものとも読めなくはないかと感じています。
グスコーブドリの伝記	宮沢賢治の童話。昭和東北大凶作の時期の作品であり、異常気象や火山噴火などをモチーフにした作品。
『方丈の海』	在仙劇作家でTheatre Group OCT/PASSを主宰した石川裕人の劇作品。2012年8月初演。これが石川の遺作となり、翌2013年10月に再演された。さらに2021年2月、「仙台舞台芸術フォーラム2011→2021東北」の主要イベントとして再々演された。
貞山運河	伊達政宗公のおくり名を冠した、400年以上前に開削が始まり現在に続く歴史的土木遺産。歴史的価値のみならず、津波到達遅延効果が認められたなどの防災の観点も含まれることから、災害文化の視点から、観光・教育・レジャーなどへの展開が期待される。
『夜と霧』	震災後、仙台市内の書店には、この本が平積みにされた。ウィーン出身の精神科医、ヴィクトールフランクルが、自分も含め強制収容所でいかに人が生きたかを著した書。フランクルは、「困難な状況に陥り、何の自由も無いように見えても、私たちには与えられた状況に対して、どのような態度をとるかの自由が残されているのです」として、極限の状況の中でも、周囲に思いやりのある言葉をかけた人や、ポケットに隠し持っていたパンのかけらを与えた人なども紹介している。震災後に求められた意味をもう一度掘り起こしたい。
『ありがとうの詩』(河北新報社)	読者からの「震災後お世話になった人たちに、ありがとうを伝えたい」との要望を受けて企画。500通近い応募の中から選ばれた、最優秀・優秀作品が掲載された詩集は、楽曲集CDとともに2012年3月に出版された。
「地名」に込めた先人からのメッセージ	梅や桜などの字が入った地名は災害地名。ウメは土砂崩れなどによって埋まった場所。サクラはクレなどの読みが変化し崩れた場所など。若林区「石場」はアイヌ語で読み解ける。(地名研究家の太宰幸子さん)
震災をモチーフにした演劇	生田恵氏、井伏銀太郎氏、故石川裕人氏、なかじょうのぶ氏、相澤一成氏、中村大地氏ほか、地元ゆかりの劇作家によるオリジナル戯曲が多数ある。
東松島市「あの日を語り伝える」	南海トラフ地震で国内最大級の34メートルの津波高が想定される高知県黒潮町からの「被災地の生の声を聞きたい」との依頼を受け、一般社団法人東北地域づくり協会が制作。当時の行政対応の様子や現場での苦悩が、生々しく語られている。
震災遺構の(観光)資源化	東日本大震災後、被災地を訪問するツアーは多数あり、被災の風景・復興商店街・かたりべなど様々なコンテンツを組み合わせて被災地ツアーが実施されてきました。震災から10年経過すると、被災地の様子を見るだけのツアー、被災地のみを訪問するツアーは減少してきており、被災地+観光地を組み合わせたものの需要が多くあります(観光庁の事業で調査しました)。阪神大震災も中越もそうですが、災害から時間がたってしまうと、その災害遺構だけをみる行為(観光・旅行)は減少し、訪問地を決めたあとに「あそこに遺構があるからみにく」という訪問優先順位が逆になっています。どのような災害でも、あとに残るひとが思い出せるような、行って確認できるような資源化は必要かもしれないと思いました。
「仙台短編文学賞」	(仙台短編文学賞設立主旨より) 「震災から六年が過ぎ、風化と忘却が進んでいます。いま一度言葉の力を信じたい。過酷な体験を新しい言葉で表現するための枠組みを創りたい。そう考えています。震災を経験した仙台から、次の世代の文学が産まれることを願って、私たちは「仙台短編文学賞」を創設します。(2017年7月20日)」
「花は咲く」	東日本大震災の被災地および被災者の物心両面の復興を応援するために制作されたチャリティーソングで、日本放送協会(NHK)が、震災後の2011年度から行っている震災支援プロジェクト「NHK東日本大震災プロジェクト」のテーマソングとして使用するために企画制作した。作詞は宮城県仙台市出身の岩井俊二が手掛け、作曲・編曲も同県同市出身[1]の菅野よう子が担当している。歌唱参加者は、岩手県・宮城県・福島県の出身者とゆかりのある歌手・タレント・スポーツ選手で、「花は咲くプロジェクト」名義となっている。

事例の「名前」	事例の説明
スモン(インドネシア語で津波)	インドネシアのスマトラ州にあるシムル島で伝わる、ナンドンと呼ばれる島特有の四行詩の一つ。シムル島では、この詩を使い、津波や大きな地震があったら高台に逃げることを後世に伝えていた。(佐藤翔輔氏監修　災害伝承の大研究より)
河川敷の桜並木	以前テレビで堤防の強化の目的があったというのを見ました。仙台でもそうした事例を紹介(実証)できたら面白いかなと思いました。(例えば笊川の桜並木など)
飢饉供養塔	天明・天保の飢饉での死者の供養塔が市内各所にあるようです。
ダークツーリズム	災害被災跡地、戦争跡地など、人類の死や悲しみを対象にした観光のこと。
災害エスノグラフィ	災害現場に居合わせた人たちが何を見、何を聞き、何を考えて、何を決めていったのかを、その人々自身の言葉を元に再構築し、災害現場にある「暗黙知」を明らかにする手法。マスコミや調査研究によって整理された「形式知」とは対局にある。仙台市役所でもこの手法に基づく「仙台市職員間伝承ガイドブック」を作成して、職員研修に活用している。
古文書(文化財)の修復・整理	東日本大震災では地震や津波によって多くの古文書等が損傷、水没した。これらを大學等研究機関がボランティアの協力も得ながら組織的に救出して修復・整理する活動が注目された。古文書には過去の災害に関する情報を伝えるものも多くあり、これらを修復・整理して読み解くこと自体が将来の災害に備えるための重要な情報となることが期待されている。また、災害によって、これまで知られていなかった文献が発見された例もある(※要確認)
宮崎市「外所(とんどころ)地震供養碑」	1662年に起きた日向灘地震から50年毎に供養碑が立てられている。最近では2007年に350年目の供養祭が行われ7つ目の碑が立てられた。仏教では50年忌を弔いあげとされ、それ以降は年忌を行わないが、大きな災害の犠牲者を弔うため、あえて50年毎に行っている。
大阪大正橋の「地蔵盆」	地震・津波の警告を刻んだ石碑の文字が読めるように毎年文字に墨を入れる(1854年安政南海地震)
震嘯記念館(海嘯記念館)	昭和三陸津波後に、義援金によって県内32カ所に震嘯記念館(海嘯記念館)が建設され、災害の伝承や集会所など地域振興の拠点として使われてきた。その最後の一つ「宿集会所」(気仙沼市唐桑町)も、2022年に解体された。
◯◯の日	関東大震災や阪神淡路、伊勢湾台風など大きな災害があった日を記念日にすること
日本一低い山「日和山」	もともと標高6メートルだった蒲生日和山が、津波で3メートルの日本一低い山になったことで年に一度山開きを催している。遊び感覚を取り入れた災害伝承。
災害伝承施設	東日本大震災のあとに、震災遺構としてのこされた施設や、伝承施設として新設されたものが多数ある。仙台であれば、戦災復興記念館も災害伝承の役割をもっている。
語り部	東日本大震災以降、各地でこの活動が実施されてきている。過去には「語り部」とよばれることなく「津波てんでんこ」のように語り継がれてきた言葉があるが、「語り部」活動は、災害時にどのように避難したか、どのように地域が復興してきたか、など様々なテーマで災害を広く伝えていこうという活動。
被災者の言葉　(例:釜石東中学校の生徒の言葉)	「釜石の奇跡」との言い方は後に改められたが、釜石東中の生徒たちが震災後の防災イベントで発表した言葉は、伝え続けたいメッセージである。 ＊「奇跡は、普段をきちんとすることで起こすことが出来るのです。～私たちが、その証明です」＊避難訓練の時、もっと高いところに行かなければだめだと教えてくれたのは地域のおばあさんだった。大人の話を聞くようにという教え、お年寄りを大事にするようにという教えは、本当に私たちをおもってのものだったと分かった。「なぜなら、私たちが生き残ったからです」
被災地に移住した人びと	災害ボランティアの活動ほか、震災をきっかけにこちらへ移り住んだ人がたくさんいますよね。

事例の「名前」	事例の説明
復興ツーリズム	災害からの復旧・復興の様子を見ることを目的とするツアー。見る、聞くだけでなく、ボランティア活動、復興イベントへの参加、被災地での買物支援など、行動内容は幅広い。ボランティアツアーは、阪神大震災以降、広がってきた。
女川いのちの石碑	「1000年先の命を守りたい」との想いで、女川の中学生たちが、町にある21の浜の津波到達地点に石碑を建てました。
KIBOTCHA（キボッチャ）防災体験型宿泊施設	旧野蒜小学校の校舎を利活用した、防災教育の拠点。
まちなかに潜む災害のコンセキ	●火事・・・芭蕉の辻の道幅（大正8年南町大火） ●戦争・・・東二番丁小のクスノキ、市博物館の初代政宗公騎馬像、桜井薬局前の仙台空襲爆心地　●地震・・・坂下交差点・宮城野大通の長町～利府断層、仙台城の崩れた石垣　●火砕流・・・評定河原（350万年前の火砕流）など
銀杏の街路樹	火に強く燃えにくい銀杏を街路樹とすることで延焼を防ぐ。東京都千代田区にある銀杏は関東大震災による大火災を生き抜き「帝都復興のシンボル」となった。
地震発生時の初動【石巻市】	月の大地震の際、沿岸部からは遠いが、地震発生時に車で山の方に避難する方が多く、とにかく逃げる文化が浸透していると感じた
住宅の震災対策	市の基準があるわけでもないが地元の業者のアドバイスにより当初想定より家の基礎を高くした。地元業者の経験等により、近所の家もその基準を導入しており、ここにも独自の文化があると感じた。
気候に基づく屋根の形	北海道や東北などの豪雪地帯の家の屋根は、落雪に伴う事故防止などのため平な屋根が多い。 昔は合掌造りなどの急勾配にしているところが多かった？
ブロック塀の減少	地震によりブロック塀が倒壊し，下敷きとなる被害が多発。石塀から金属や木のフェンスにかわってきている。
【WS】避難所運営ゲーム(HUG)	避難所の運営にあたり収容や様々な事態の対応を短時間に決定するシミュレーション
気仙沼内湾のピア7付近	東日本大震災後につくられた防潮堤の活用事例。単に海と陸をさえぎる防潮堤ではなく、有事の際には防潮堤として機能するように設計されており、防潮堤上部は店舗などの施設をたくり活用している。防潮堤をつくるのかどうかという論議があったが、その機能について工夫をしたもの。
災害危険区域	津波、高潮等により著しい危険があるエリアを条例で指定し、住居用の建築制限をかける仕組み。
ふろ水をためておく	お風呂のお湯を流してしまわずに、入浴後はそのままためておいて、翌日の入浴前にお湯をはりかえるようにしています。3.11のあの日、たまたまお湯を抜いてしまっていて、「ああどうして今日にかぎって・・」と悔やみました。自分の経験談ですが。
公衆電話	停電時、携帯電話の電池がなくなるとこまるので、公衆電話がどこにあるか確認するようになりました。
寺での炊き出しの習慣	災時に400人を超える避難者の臨時の避難所になった、石巻渡波地区の「洞源院」。5ヶ月に及ぶ避難者生活を円滑に出来た要因のひとつに、長年、年に2度参拝者に振舞ってきた炊き出しの習慣があった。

事例の「名前」	事例の説明
長崎市山川河内(さんぜんごうち)の「念仏講まんじゅう」	月命日に全世帯に配る(1860年土石流被害)
「結い」の文化	南三陸町入谷地区ひころの里での聴き取り:突然鳥の声が聞こえなくなり、地震が起きる。ただ事ではないと家に戻ると、既に男たちは農業用の発電機で湯を沸かし、女たちは握り飯をつくる準備をしていた。やがて海の方から津波の情報が届き、地元民しか知らない山道を使い避難場所に握り飯を届けた。これらの動きは、地域で火事が起きるなど、災害時には必ず取る行動だったとのこと。このような話は枚挙にいとまがない。
ローリングストック	災害時の食料を確保するために特別な「非常食」を用意する代わりに、普段から少し多めに食材、加工品を買っておき、使ったら使った分だけ新しく買い足していくことで、常に一定量の食料を家に備蓄しておく方法。
災害対応の自動販売機	災害時に無償で飲料を提供したり、状況を表示する自動販売機
山林の手入れ	適度な伐採や下草刈など手入れされた山は保水力が高く、土砂崩れになりにくい。
みやぎの「花は咲く」合唱団	(音楽の力による復興センター・東北の事業の一つ)2013年当時、宮城野区内の仮設住宅や津波浸水地域に居住するシニア(概ね60歳以上)を対象に公募して結成された合唱団。震災ソング『花は咲く』だけを歌うために始まった。
Date fmサバ・メシ防災ハンドブック	エフエム仙台が2011年から毎年発行しているハンドブック。災害時に簡単に作れる非常食「サバ・メシ」を、より美味しく、楽しく調理するためのアイデアと工夫が満載です。
リモート会議・打ち合わせの普及	従前より実施可能ではあったが、コロナ禍を機会に普及が伸びたため、災害(コロナではあるが)を機とした文化である
【WS】クロスロード	災害時のジレンマを疑似体験、あるいはジレンマを回避するための、イメージトレーニング
国境なき劇団	阪神淡路大震災(DIVE)、東日本大震災(ARCT)、熊本地震(SARCK)それぞれ震災を期に立ち上がった舞台芸術団体が結成した非営利組織。互いの知見を共有し、今後の活動を計画中。
海辺の図書館	津波で流された自宅跡地を「海辺の図書館」として開放。毎月第二日曜の「深沼ビーチクリーン」など主催・事務局。
オール電化に頼らない	震災の経験から、電気のみに頼らずガスも導入し、停電の対策をとっています。私の家もガスもいれたり、給電の可能な自動車を選んだり、ポータブル電源を購入したり一つのインフラに頼らない対策をしています。
Phase Free(フェーズフリー)備えない防災	災害用に特別なものを用意して「備える」のではなく日常と非日常を分けずに役立てる概念
【WS】図上避難演習(DIG)	地図上に防災拠点を記入し、次に地域のハザードを記入してグループディスカッションを行い、災害危険度と行動や準備について認識を共有する
【課題】ハザードマップ	自治体は災害種別ごとに作成しているが、地形の分析が不足しているため示された通りの災害が起こるとは限らない。過信しない、信じない、というハザード(予測できない)意識を遠ざけてしまう傾向もある。

事例の「名前」	事例の説明
Team　Sendai	仙台市職員による所属を超えた自主研究グループ。聞き取りと朗読を活動の中心に、様々な勉強会を行う。
せんだい わらアート	地下鉄東西線開業イベントとして2015年12月から開始。復興を果たして収穫した若林区のコメの稲わらで巨大な恐竜などのオブジェを制作。現在も実行委員会を組織し農業園芸センターで実施中
仙台短編文学賞	2022年で第五回。毎回審査委員長を変えて選考。特に震災をテーマに求めていないにもかかわらず、毎回震災関連の作品が応募され「震災の十字架を背負った文学賞」と言われる。
「結～現場の事実・心の真実」若林消防署	職業的救援者である消防署員や消防団員は、責任の重い決断、危険な状況下での活動、任務の失敗、長時間の救護活動や家族の安否がわからないまま災害現場を体験するストレスなどによりガス抜きが必要だったため、匿名で発表もしないことを条件に手記を書き綴った。その手記を中心にメモリアル交流館の企画展として開催したもの。現在は若林消防署の1階に再現し常設展示している。また、メモリアル交流館では簡易パネル版を作成し、貸し出しも行っている。
「あの日からのみちのく怪談」コマイぬ読み芝居	東日本大震災の特徴として怪談話が数多く語られている。地元の出版社「荒蝦夷」がそれらを取材し作家が書き下ろした本「渚にて」をテキストに、プロジェクト劇団「コマイぬ」が読み芝居として舞台化。当事者本人では言えないセリフや不思議に思えないエピソードは、味わい深く観客の心を暖める。
こどもとあゆむネットワーク	2011年4月1日せんだい演劇工房10－BOXで3年間の活動を開始。新品の絵本を募集し、仕分けして被災地・沿岸部の図書館や保育所、幼稚園などのニーズに応え続けた。組み立て式のオリジナル段ボール本棚なども届けた。配送ルートは極秘だったが1万部を超える絵本を確実に手渡すことができた。
【過覚醒】症状	異常な出来事に対する正常な反応として、自分の周りの世界が変化して奇妙に見える、自分が自分と言う感じがしない、自分が考え行動しているという実感がない、などの症状と共に「アーティストになった」と自覚し表現活動を行うが、周囲からはアーティストと指摘されずにいるため、自分からは申し出ないケース
震災俳句・震災短歌	高野ムツオ氏の句集、佐藤通雅氏の歌集ほか、言葉で切り取られた心象風景の断片。
デジタルアーカイブ	東京大学・渡辺英徳氏らの取り組み(https://labo.wtnv.jp/p/blog-page_29.html) 遠い記憶として流れ去ろうとする惨劇を今に残す。証言者を顔写真のアイコンで表すことにより、メッセージ性と記憶の定着のしやすさを兼ね備える。
記憶の解凍もしくは記憶を地続きに	東京大学・渡辺英徳氏が進めるもう一つの取り組み。AIと人とのコラボレーションによって白黒写真をカラー化し、対話を生み出す「記憶の解凍」の活動。 ※事例として特筆できるかどうかは不明でしたが、あえてこの2点を取り上げた理由は、シンポジウムでご一緒した時に氏が発言した、自分たちの取り組みは、「今この時代に生きている私たちと、その‘記憶を地続きにする’ことが出来る」との考え方。それが、我々が「震災文化伝承」を提言する上で、大事な一つのキーワードになるのではと考えたからです。
【課題】官民協働	阪神淡路大震災では被災者のニーズと支援者をつなぐコーディネート機能が不在。東日本大震災では政府の現地対策本部、宮城県、ボランティアセンター(社協)とNPO・NGO・ボランティア団体との4者の連携・調整の取り組みに対し、当事者間の警戒心のような「壁」や「溝」が生じた。
3.11伝承ロード	震災伝承施設をネットワーク化する「震災伝承のプラットフォーム」を構築。地域の防災力の向上と被災地の地域振興を目指す。(一般財団法人3.11伝承ロード推進機構)
ハザードマップ	災害リスクがわかる
「それでも下水は止められない」 南蒲生浄化センター(第3ポンプ場)	仙台市の7割の汚水を浄化する巨大施設が津波の直撃を受け、10年以内の復旧は絶望的と考えられたが5年足らずで失った機能を上回る施設が落成。広大な敷地を半分に折りたたんだ状態の新施設エリアに対し、建設中も稼働し続けた旧施設エリアは現在、更地になり津波を正面で受けた衝撃を伝える第3ポンプ場が残されている。正面には変わらない海を臨み、世界に誇る先端下水処理施設と震災遺構が残る広大な敷地には、過去・当時・未来の時間軸が交差している。そこに関わった人たちの死闘ともいえるドキュメントをメモリアル交流館で企画展示。現在は全員が避難して助かった管理棟の1階に再現し常設展示している。メモリアル交流館では簡易パネルを作成し、貸し出しも行っている。

事例の「名前」	事例の説明
【視点】「アップサイクル」より良く出現	1800年代のアメリカの思想家ラフル・ワルド・エマソン「自然界には寿命を終えて捨てられるものはない。そこでは最大限利用された後も、それまで隠れていた全く新しい次のサービスに供される」という概念。震災前から日常にあった文化がより良く、または別の価値に生まれ変わるケースであり、生まれ変わった新しい物には新たな分類や名称が必要
【視点】震災前からあった文化	震災前から潜在的にあった文化で、震災によって価値が失われない、色あせない、むしろ顕在化した文化
他災害被災者や遺族との交流・連携のサポート	今年も何人かの東日本大震災被災者が、御巣鷹山にのぼった。遺族の会「8.12連絡会」事務局長の美谷島邦子さんのもとには、災害や事故で家族を亡くした方々が、「自分たちの先を歩いてくれている方から学びたい」と、多くの声が寄せられる。東日本大震災の被災者からは、10年を経て、どうやって語り継いでいったらよいかなどの悩みが寄せられているとのこと。長年活動を続ける遺族の会から学ぶものは大きい。美谷島さんは、絵本を制作したり、公的機関、子ども達などに伝える活動を行うなど、様々な取り組みをしている。語り継ぎをしている被災者の方々が、苦労をしながらこうした学びや交流をされているので、そうした活動を応援することも大事かと考える。
【共助】自主防災組織	地域で自主的に「自分たちの地域は自分たちで守る」という自覚と連帯感に基づいて結成される。（災害対策基本法の規定）
「あなたのオモイそれぞれのカタチ」宮城野区文化センター	震災復興交流事業
津波到達エリアの表示	過去の津波による災害においても、浸水地点を記す物はあったが、馴染みがなく、かつ伝承されにくかったが、東日本大震災による浸水地点は、道路標識や建物表記など、より市民に身近なものへ記されるようになった。
【課題】みなし仮設住宅	被災者の8割以上が自ら民間賃貸住宅を探して入居し、県が契約名義を書き換え借主になった。仮設住宅より居住水準が高い反面、居住地がバラバラで情報過疎が発生した。また大都市に物件が多いため被災地域の人口流出が大きかった。
【共助】地区防災計画	マンション、地下街、大型商業施設、中山間部など生活環境を共有している住民主体の防災計画
せんだい3.11メモリアル交流館	「震災復興メモリアル等検討委員会」の提言を受け2016年2月13日に全面オープン。沿岸部への玄関口として、集い、つながり、伝え、様々な活動を展開するメモリアル拠点施設。これから仙台市中心部に開設予定のメモリアル中央館との相関関係が生まれる。
Safety Information Card	訪日外国人旅行者が災害発生時に安心・安全のために利用できる多言語情報を一覧化したカード
【共助】いわゆる福祉避難所	指定福祉避難所に対し、指定されていない環境に要配慮者が滞在するための協定を締結するなどして開設する場
【課題】プッシュ型支援	現地からの要請を待たずに支援物資などを送る画期的な制度。初めて熊本地震で実施されたが、自治体は建物被害や職員不足のため、物資の滞留や大渋滞が発生した。
災害エフエム局	正式名称は「臨時災害放送局」。放送法施行規則第7条第2項第2号に規定する「暴風、豪雨、洪水、地震、大規模な火事その他による災害が発生した場合に、その被害を軽減するために役立つこと」を目的とする放送を行う基幹放送局で、阪神淡路大震災を機に創設された。市町村や関連機関からの被害状況や避難情報等伝達事項ばかりでなく、精神的な被害を軽減する音楽やお笑いなどの軽い娯楽などの番組もあり、放送エリアが狭い分、生活に密着したコミュニケーションの場となった。
ラジオ	災害時の情報源として、最も生活に実装されたツールだと思います。

事例の「名前」	事例の説明
災害応急用井戸	災害時の水を提供することに同意して仙台市に登録、表示している井戸
【共助】トイレトレーラー	災害派遣トイレネットワークプロジェクト「みんな元気になるトイレ」助けあいジャパン。快適な移動水洗トイレとして普段はイベントなどで使われ、災害発生時には被災地に集結する
津波避難広報ドローン	津波警報発表の際などに、ドローンが全自動で離陸、飛行し、避難呼びかけを行うもの。